静岡・建穂寺の彫刻

浅湫　毅

はじめに

京都国立博物館では平成十九年度より四箇年の計画で、科学研究費補助金（基盤研究A）による「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」というテーマのもと調査を行なっている。[1] 本調査はその一環として行なったものである。[2] 当館はかつて静岡の鉄舟寺において総合調査を行ない、[3] その結果から、この地が東西文化の接点にあり、日本文化について考える際に重要な地点であることに気づかされていた。上記科研テーマのもと、なぜ静岡の地にある建穂寺を調査の対象として選んだのか、という理由もそこにある。

建穂寺は瑞祥山と称し、伝承によると飛鳥時代後期に道昭によって開かれ、奈良時代には行基が中興となったともいう古刹である。[4] 当寺も明治初年の廃仏のなかで、往時の寺勢は失われ、現在では観音堂が残るのみとなっているが、かつては大伽藍を構えた駿河有数の大寺院であった。その名残をしめすのが、現在観音堂に安置される古仏の数々である。その重要性から、すでにそのうちの二躯は静岡県の指定文化財にもなっており、過去にも参考となる報告類や歴史書も出されているが、[5] 今回、あらたな視点より調査を行なわせていただき、いくつか気づく点もあったので、ここに報告するとともに、最後に若干の考察を加えたいと思う。

調査報告[6]

1　千手観音立像〈秘仏〉（挿図1）

【法量】像高（頂上仏含む）一二六・二（髻頂）一一六・二、髪際高一〇二・一、頂―顎（髻）二六・七、面長一二・三、耳張一三・九、面幅一一・一、臂張（合掌手）三三・二、裾張二七・〇、足先開（外）一六・九（内）八・一、台座高三九・二

【形状】四十二臂通形の千手観音立像。頂上仏面。頭上面、化仏坐像を表わす。髻、地髪毛筋刻む。天冠台波状（下から紐二条、列弁）で漆箔を施す。頭髪群青、髪際緑青、眉・ヒゲ群青

と緑青、唇朱彩を施す。天衣、条帛、裳、腰布を著す。合掌手、宝鉢手、脇手左右十九手（左は一手欠）を表わす。持物は後補。

【品質・構造】木造（クスノキかとみられる広葉樹）、素地、一部彩色、玉眼嵌入。頭部は耳後で前後に二材を寄せる。体部も前後で二材を寄せる。頭体別材。合掌手と宝鉢手の上膊は左右とも各一材より彫出し、肘先にて別材矧寄せ、合掌手は手首先別材（左右共木）。脇手は左右とも三列に六・七・六臂を矧寄せる。

【時代】南北朝時代か

【備考】厨子入りの秘仏。厨子より取り出さずに調査したため詳細は不明。

2　千手観音立像〈前立〉（挿図2）

【法量】像高一二一・一（頂上仏面より）

【形状】四十二臂通形の千手観音であるが、現状では脇手左右各十九臂のうち、左前列五臂、中列五臂、後列五臂、右前列四臂、中列七臂、後列六臂のみ現存し、他を欠失する。

【品質・構造】木造（寄木造）、彩色、玉眼。頭体幹部は耳後で前後に矧ぐ。頭体は割首とし、内刳を施す。

【時代】室町時代か

【備考】秘仏本尊（作品1）の前立像。割首とする点など古様さを残すが、後世の補修が多いため製作年代は確定しがたい。

3　風神像（挿図3）

【法量】像高（風袋まで）七〇・二（頭頂まで）六八・八

挿図1

挿図2

挿図3

【形状】巻髪。背に風袋を負う。左膝地に付け、右膝を立てる。手指四本。足指二本。
【品質・構造】木造（ヒノキ材か）、彩色、彫眼。頭体幹部前後二材。右大腿部に別材を寄せる。
【時代】江戸時代

4

雷神像（挿図4）
【法量】像高七四・一
【形状】逢髪。背に太鼓を負う。左膝を立て、右膝を地に付ける。手指四本。足指二本。
【品質・構造】木造（ヒノキ材か）、彩色、彫眼。頭体幹部前後二材。左大腿部に別材を寄せる。
【時代】江戸時代

5

二十八部衆立像のうち 伝金色孔雀王（挿図5）
【法量】像高九九・二
【形状】象頭を被る。着甲。両手屈臂し、左手五指を握り、右手掌を前に五指を伸ばす。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。
【時代】江戸時代
【備考】五部浄居天か

6

二十八部衆立像のうち 伝密迹金剛（挿図6）
【法量】像高九八・八
【形状】髻を結う。開口。左手上方に掲げる。右手垂下し、五

挿図4

挿図5

挿図6

指とも伸ばして掌を下に向ける。
【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。
【時代】江戸時代
【備考】那羅延堅固王か

7

二十八部衆立像のうち 伝満善車王（挿図7）
【法量】像高九五・七
【形状】髻を結う。面部裂け、下の顔がのぞく。着甲。左手屈臂し、掌を上に向ける。右手上方に掲げるが手首先欠失。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。
【時代】散脂大将か

8

二十八部衆立像のうち 伝畢婆迦羅王（挿図8）
【法量】像高九二・八
【形状】蓬髪。開口。着甲。両手屈臂。左手蛇を執り、右手五指を握るが、持物失う。
【品質・構造】木造（寄木造、ヒノキ材か）、彩色、彫眼。体幹部は背面後方寄りで前後二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代
【備考】現状の木札では大弁功徳天とする。

9

二十八部衆立像のうち 迦楼羅王（挿図9）
【法量】像高九八・八
【形状】炎髪。鳥相。背に羽を負う。左を向き、右足先を浮かす。
【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。左耳と右後頭部を通る

挿図7

挿図8

挿図9

線で前後二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代

10 二十八部衆立像のうち 伝緊那羅（挿図10）
【法量】像高九五・二
【形状】髻を結う。左を向く。左手屈臂し手を上方に掲げる。右手五指を握る。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。頭体幹部は前後二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代
【備考】調査時の木札では毘楼勒叉天王と表示するが、本来は毘沙門天か。

11 二十八部衆立像のうち 伝散脂大将（挿図11）
【法量】像高一〇二・五
【形状】髻を結う。開口。右を向く。着甲。両手屈臂。左前膊欠失。右五指とも握る。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。頭体幹部は、左後頭部から右耳後方を通る線で前後二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代
【備考】東方天か

12 二十八部衆立像のうち 摩和羅女（挿図12）
【法量】像高九一・九
【形状】右衽の長袂衣を著し、胸前で合掌する。
【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。頭体幹部背面後方寄り

挿図10

挿図11

挿図12

で前後二材を矧ぐ。面部首前あたりで割矧ぎ、玉眼を入れる。
【時代】江戸時代

13

二十八部衆立像のうち 伝大弁功徳天（挿図13）
【法量】像高九二・〇（髻欠）
【形状】炎髪。裲襠衣。両手とも五指を伸ばして腰鼓を打つ形。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。ヒノキ、寄木造。体幹部背面後方寄りで前後二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代
【備考】緊那羅か

14

二十八部衆立像のうち 摩醯首羅王（挿図14）
【法量】像高九七・〇
【形状】髻を結い、頭飾を表わす。右を向き開口。左手肘を横に引き、右手屈臂して掌を前に向ける。領布、短裳を着し、裸足。
【品質・構造】木造（ヒノキ材）、彩色、彫眼。背面後ろ寄りで前後二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代

15

二十八部衆立像のうち 伝東方天（挿図15）
【法量】像高九七・一
【形状】兜を被り頂部に宝珠を表わす。着甲。左手上方に掲げ、右手腰脇。左脚を曲げ、現状丁字立ち。
【品質・構造】木造（ヒノキ材）、彩色、彫眼。頭体幹部背面後ろ寄りで前後二材を矧ぐ。

挿図13

挿図14

挿図15

【時代】江戸時代
【備考】毘楼博叉天か

16

二十八部衆立像のうち 婆藪仙人（挿図16）
【法量】像高九二・〇
【形状】頭巾を被り、上半身は裸形。下半身には腰布、獣皮をまとう。持物亡失。
【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。後頭部で前後に二材を矧ぎ、内刳り。両手、肩、肘、手首、両足先を矧ぐ。
【時代】江戸時代

17

二十八部衆立像のうち 伝毘楼博叉天（挿図17）
【法量】像高九六・四
【形状】髻を結う。正面に頭飾。上歯で下唇を噛む。着甲。左手屈臂して五指を握る（戟を執る）。右手垂下し掌を下に向け五指を伸ばす。わずかに右を見て右脚を出す。
【品質・構造】木造（寄木造、ヒノキ材）、彩色、彫眼。背面後ろ寄りのところで前後に二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代
【備考】あるいは毘楼勒叉天か

18

二十八部衆立像のうち 伝毘楼勒叉天（挿図18）
【法量】像高九八・三
【形状】髻を結う。正面に頭飾。着甲。やや左を向く。左手を腰にあて、右手を屈臂して独鈷杵を執る。

挿図16

挿図17

挿図18

【品質・構造】木造（ヒノキ材）、彩色、彫眼。背面後ろ寄りで前後に二材を矧ぐ。
【時代】江戸時代

19

二十八部衆立像のうち 伝乾闥婆王（挿図19）
【法量】像高一〇二・八（炎髪含む）
【形状】炎髪。領布、短裳を著し、沓を履く。左手腹脇で掌を上に五指を伸ばす。右手横に張り出す（前膊より欠）。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。
【時代】江戸時代
【備考】薩遮摩和羅か

20

二十八部衆立像のうち 摩睺羅伽王（挿図20）
【法量】像高九九・三（双髻含む）
【形状】双髻。五眼。領布、短裳を著す。左手屈臂（手首先欠）し、右手腹脇。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。
【時代】江戸時代

21

二十八部衆立像のうち 神母天（挿図21）
【法量】像高九八・三
【形状】髻を結う。天冠台。額に皺三条刻む。両肩先欠失。裳を著し沓を履く。わずかに左を向く。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。
【時代】江戸時代

挿図19

挿図20

挿図21

22

二十八部衆立像のうち 伝那羅延堅固（挿図22）

【法量】 像高九三・七

【形状】 童子形。上半身裸形。短裳を著し沓を履く。左手上方に掲げ、五指握る。右手腹脇にあてる。

【品質・構造】 木造、彩色、彫眼。

【時代】 江戸時代

【備考】 毘舎闍あるいは乾闥婆か

23

二十八部衆立像のうち 帝釈天（挿図23）

【法量】 像高九四・七

【形状】 正面山形頭飾。着甲し、袈裟を偏袒右肩に著す。沓を履く。左手腰脇で握り、右手屈臂して五指を握る。

【品質・構造】 木造、彩色、玉眼嵌入。

【時代】 江戸時代

24

二十八部衆立像のうち 難蛇龍王（挿図24）

【法量】 像高一〇九・九（龍含む）

【形状】 龍を頭上に表わす。冠と唐服を著す。

【品質・構造】 木造、彩色、彫眼。

【時代】 江戸時代

25

二十八部衆立像のうち 大梵天王（挿図25）

【法量】 像高九五・二

【形状】 頭部正面に山形頭飾を表わす。両手屈臂し、左手に宝珠を執り、右手は五指握る。襤褸衣、長袂衣、筒袖衣を著し、

挿図22

挿図23

挿図24

沓を履く。
【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。
【法量】江戸時代

26

二十八部衆立像のうち 伝五部浄居天（挿図26）
【法量】像高九二・二
【形状】頭部正面に山形頭飾を表わす。着甲し、沓を履く。左手屈臂し、掌を上に向け五指を握る。右手腹前で五指を握る。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。
【時代】江戸時代
【備考】毘楼勒叉天あるいは金毘羅か

27

宝冠阿弥陀如来坐像（挿図27・図18～20）
【法量】像高七一・七、臂張三七・八、胸厚（左）一六・二、腹厚一七・八、坐奥三三・〇、膝張四八・八、膝高（左）九・二（右）一〇・〇
【形状】高髻を結い、天冠台を被り、袈裟を通肩に著して、一・二指を捻じて定印を結ぶ。右足上に結跏趺坐する。
【品質・構造】木造、漆箔。体幹部は一材からなり、背板をあてる。両腰に小さな三角材、脚部に横一材を矧ぐ。頭部は左右二材。面部は天冠台下と耳前で切断し、玉眼を嵌入する。
【時代】体部：平安―鎌倉時代　頭部：桃山時代、慶長十八年（一六一三）
【銘文】首枘側面墨書銘
「□尊ハ竹保／法花シヤウキ／ヤウタウノ本尊也／府／

挿図27

挿図26

挿図25

ハ作之也／仏師三位／慶長十八年／□月吉日」
※ただし全文は判読できず。

28

伝大日如来坐像（挿図28・図21～23）

【法量】像高三七・六、髪際高二九・一、頂―顎一五・七、面長六・〇、耳張八・一、面幅六・三、面奥八・〇、臂張一九・三、胸厚（右）七・四、腹厚九・一、坐奥一七・二、膝張二七・二

【形状】高髻を結い、天冠台（下から紐二条・連珠・花形？）を表わす。地髪まばら彫りとし、下端に面取りを施す。三道を刻む。天衣、条帛を著す。現状右手を上に定印を結び、右脚上に結跏趺坐する。

【品質・構造】木造、漆箔、彩色、彫眼。頭体幹部は、髻を含めて左耳なかばから右耳前を通る線で前後に割矧ぎ、地髪まで内刳り。両腰部、脚部、両前膊後補。

【時代】平安～鎌倉時代

【備考】もとは宝冠阿弥陀（作品27）の脇侍菩薩かとみられる。

29

如来形坐像（説法印）（挿図29・図4～8）

【法量】像高六二・一、髪際高五四・七、頂―顎二一・〇、面長一二・九、耳張一五・二、面幅一一・八、面奥一五・八、臂張三六・八、胸厚（右）一七・三、腹厚二〇・九、坐奥三八・〇、膝張四九・三、膝高（左）一〇・八（右）一〇・二

【形状】螺髪植付。髪際湾曲。耳朶貫通。三道を刻む。袈裟を偏袒右肩に著し、衣縁で右肩を覆う。胸前で一・三指を捻じて説法印を結ぶ。左足を上に結跏趺坐し、衣で足裏をかくす。

挿図28

挿図29

【品質・構造】木造（寄木造）、漆箔、金泥、彩色、玉眼嵌入。頭体幹部は前後に二材を寄せ、割首とする。頭部には二センチ幅のマチ材を前後材の間にはさむ。マチ材は左右二材。左体側、右肩先、右腰、脚部横二材、左袖、右肘、両手首で別材を寄せる。地付より五センチのところまで布貼りを施し、八センチのところまで黒漆を塗る。

【時代】鎌倉時代

【備考】伝承では阿弥陀とし、印相も阿弥陀の説法印のようにみえるが、左足を上に結跏趺坐する点から、阿弥陀とは断定せずに如来形とした。

30

如来形立像（挿図30・図24）

【法量】像高三三・八

【形状】螺髪刻出。偏袒右肩に袈裟を著し、右肩に覆肩衣を表わす。両前膊、両足先欠。

【品質・構造】木造、現状素地、彫眼。一木より頭体幹部を刻出。

【時代】平安時代

31

如来形立像（挿図31・図27）

【法量】像高四八・五（現状）、髪際高四四・四、面長五・二、耳張六・一、面幅五・二、面奥七・四、足先開（外）六・三（内）二・六

【形状】螺髪鋳出。肉髻頂部欠失。現状、袈裟を偏袒右肩に著し、衣縁で右肩を覆い、その下に覆肩衣を著す。

【品質・構造】当初部（頭部、左前膊および袈裟垂下部、右前

挿図30

挿図31

膊および覆肩衣垂下部上半、足枘を含めた足先）は銅造。その他は木（ヒノキ材）で補作する。手首先欠失、接合部に蟻枘孔残る。

【時代】銅造部は鎌倉時代

32

観音菩薩立像（挿図32）

【法量】像高三九・八

【形状】髻を結う。毛筋を刻む。天衣、条帛、裳、腰布、帯を著す。腰を右に捻り、左足を前に出す。

【品質・構造】木造、漆箔、彩色、玉眼嵌入。

【時代】江戸時代

33

菩薩形立像〈残欠〉（挿図33・図25）

【法量】像高一八・五（現状）

【形状】頭部と両肩先、両足先を失う。前傾して左足を前に出す。天衣、条帛、裳、腰布、帯を著し、裳の折り返しを表現する。腰布の結び目亡失。

【品質・構造】木造、漆箔（金箔残片あり）。現状、体部（肩部後方―踵後方）で割矧ぐ。内刳を施す。両肩部矧面上辺から約一・五センチの位置で横に鋸切る。左方矧面に竹枘孔二個、右方には孔なし。両足先別材矧ぎ（欠失）。両足枘は本体と共木より彫出する。

【時代】鎌倉時代

【備考】来迎形菩薩形（脚の出からみて左脇侍とみられ、おそらくは観音菩薩か）。両肩部矧面の鋸切りの用途は不明。

挿図33

挿図32

34

菩薩形立像（挿図34）

【法量】像高六七・二（現状）

【形状】金属製頭飾に宝塔を表わす。髻欠。地髪毛筋刻む。天冠台素文。天衣、条帛、裳、腰布を著す。

【品質・構造】木造、漆箔、彩色、玉眼嵌入。両足先、左前膊、右手首を先欠する。

【時代】体部：鎌倉時代か　頭部：江戸時代

【備考】頭飾に宝塔を表わすことから、近世には弥勒として祀られていたか。体部の年代に関してはなお検討が必要である。

35

菩薩形立像（挿図35）

【法量】像高三二・八

【形状】高髻を結う。天衣、条帛、裳、腰帯を著す。腰を左に捻る。両前膊欠失。

【品質・構造】木造、漆箔、彩色、玉眼嵌入。

【時代】江戸時代

36

地蔵菩薩踏下像（挿図36）

【法量】像高三三・六

【形状】円頂。袈裟を偏袒右肩に著し、衣縁で右肩を覆う。その下に覆肩衣を著す。左手は屈臂し、掌を上に宝珠（欠失）を載せ、右手は錫杖を執る。

【品質・構造】木造、漆箔、彩色、彫眼。前後に二材を寄せ、少なくとも前面は割首とする。

【時代】桃山時代、慶長十九年（一六一四）

挿図34

挿図35

挿図36

【銘文】像内体部前面墨書
「駿府一見之時元／此地蔵芹竹保／法花寺心福院之願主／■□□也／此本尊作之仏師足立／三郎／三位／慶長十九年／五月吉日」
【備考】面部の表現や銘文の共通性などから、宝冠阿弥陀（作品27）の頭部補修を行なった仏師による製作とみられる。

37

毘沙門天立像（挿図37・図16～17）
【法量】像高八四・六（髻含む）、髪際高七五・四、頂-顎二〇・三、面長九・七、耳張一〇・六、面幅九・二、面奥一三・八、臂張三六・五、胸厚（左）一三・九、腹厚一四・六
【形状】髻を結う。天冠台（下から紐二条・列弁）側面で湾曲する。襟甲、肩甲、胸甲、腰甲、腹帯、前盾、腰帯、天衣、籠手、長袂衣、袴、脛当を著し、沓を履く。左手を屈臂し、掌を上に向ける。右手を横に張り出す（前膊欠失）。腰を左に捻り、右脚をわずかに前に出す（足欠失）。
【品質・構造】木造、彩色。頭部は前後二材を左耳後方から右耳を通る線で寄せるが、矧面まっすぐではない。体部は前後に割矧ぐか。
【時代】体部：鎌倉時代　面部：近代か
【備考】体部は不動明王立像（作品42）と一具、面部は後補と考えられる。

38

大黒天立像（挿図38）
【法量】像高六二・三

挿図38

挿図37

【形状】頭巾を被り、袍、袴を著して俵上に立つ。左手は袋を握って左肩にかつぎ、右手は木槌を執る。
【品質・構造】木造（寄木造、ケヤキ材）、現状素地、玉眼（欠失）。頭体幹部を共木とし正中で矧ぎ、面部と左頭頂部のみ別材を矧寄せる。
【時代】江戸時代

39

閻魔大王坐像（挿図39）
【法量】像高九九・六
【形状】冠を被り、唐服を著す。左手は大腿上で甲を上に五指とも伸ばす。右手は笏を執る。
【品質・構造】木造（寄木造）、彩色、玉眼嵌入。箱型のこまかい木寄せを行なう。
【時代】室町―桃山時代

40

鬼子母神立像（挿図40）
【法量】像高五五・二
【形状】襤褸衣、筒袖衣、長袂衣を著す。左腕で子を抱く。
【品質・構造】木造（ヒノキ材）、彩色、彫眼。ほぼ一材から彫出し、背板をあてる。内刳りは無しか。
【時代】江戸時代

41

静岡県指定
不動明王立像（挿図41・図14～15）
【法量】像高六二・一、髪際高五七・二、頂―顎一二・六、面長

挿図39

挿図40

七・一、耳張一〇・四、面幅七・七、面奥九・九、臂張二四・〇、裾張一六・五、胸厚（右）一〇・五、腹厚一一・一

【形状】頂蓮。巻髪。花冠を表わす。弁髪をねじる。両眼見開く。左牙下出、右牙上出。条帛、裳、腰布を著す。臂釧、腕釧、足釧彫出。臂・足釧上より紐二条・列弁。腕釧列弁・紐二条・列弁。腰を右に捻り、左脚を前に出す。

【品質・構造】木造、彩色。手先まで一木（針葉樹、ヒノキか）より彫出。

【時代】平安時代

【備考】もとは左眼を眇めていたのを改変したものとみられる。

42

静岡県指定

不動明王立像（挿図42・図9～13）

【法量】像高七八・八、髪際高七三・三、頂―顎一四・九、面長九・〇、耳張一一・二、面幅九・〇、面奥一二・八、臂張三〇・九、裾張二一・二、胸厚（右）一三・三、腹厚一三・六、足先開（外）二〇・一（内）一二・二

【形状】七莎髻。巻髪。花冠を表わす。弁髪欠失。両眼を見開く。上歯で下唇を噛む。条帛、裳、腰布を著す。腰を右に捻って、左脚を遊脚にして立つ。臂釧、腕釧、足釧金属製（後補）。

【品質・構造】木造（ヒノキ材か）、彩色、玉眼嵌入。頭体幹部耳後方で前後に割矧ぎ。三道のかなり下で割首とする。漆下地の上に彩色を施す。現状ほぼ素地を呈す。両手首先、右足先、左耳朶後補。

【時代】鎌倉時代

挿図42

挿図41

43

不動明王立像（挿図43・図26）

【法量】像高二九・九、頂―顎六・二、面長三・六、耳張四・五、面幅三・六、面奥五・五、臂張一一・六、裾張九・七、胸厚（右）五・九、腹厚七・〇、足先開（外）六・一（内）三・五

【形状】頂蓮。巻髪。弁髪ねじる。花冠を表わす。眼を見開く。左牙下出、右牙上出。条帛、裳を著し、臂釧、足釧を表わす。

【品質・構造】木造、彩色、切金、玉眼嵌入。頭体を一材から彫出し、耳中ほどにて前後に割り、さらに割首、割脚とする。左肩先は共木。右肩、臂、手首、左手臂、手首にて別材を矧ぐ。弁髪遊離部別材。臂釧、足釧銅製（当初）。腕釧は箔押。布貼をして錆下地、白土地を施した上に彩色する。肉身群青か。

【時代】鎌倉時代

44

不動明王立像（挿図44）

【法量】像高五三・六、髪際高四九・八、頂―顎一〇・四、面長六・一、耳張八・八、面幅五・七、面奥九・四、臂張二一・四、胸厚（右）九・一、腹厚一二・四

【形状】頂蓮。地髪流れるように毛筋を刻む。弁髪結節三ヶ所。左眼を眇める。左牙下出、右牙上出。ほぼ正面を向く。条帛、裳、腰布。わずかに腰を右に捻り、左足を出す。

【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。頭体幹部は一材を左耳後方から右耳中央を通る線で割矧ぐ。両上膊、前膊は別材を寄せる。

【時代】室町時代

挿図43

挿図44

45

不動明王立像（挿図45）

【法量】像高一三・二

【形状】巻髪。両眼見開く。左牙下出、右牙上出。条帛、裳、腰布を著す。

【品質・構造】木造（一木造）、彩色。

【時代】江戸時代

46

不動明王立像（挿図46）

【法量】像高三七・三

【形状】頂蓮。弁髪欠。巻髪。両眼見開く。条帛、裳を著す。臂釧、腕釧刻出。方座に牡丹を表わす。

【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。

【時代】江戸時代、延享四年（一七四七）

【銘文】方座裏墨書

「延享四丁卯年四月廿一日／大聖院隆慶」

47

不動明王立像（挿図47）

【法量】像高三三・三

【形状】頂蓮。花冠を表わす。左眼を眇める。条帛、裳、腰布を著す。腰布の結び目を右腰に表わす。裳に羯摩を描く。

【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。岩座まで一木。面部を割り玉眼を嵌入する。

【時代】江戸時代

挿図45

挿図46

挿図47

48

不動明王二童子立像（挿図48）

【法量】像高〔不〕三五・八〔矜〕一六・三〔制〕一六・八

【形状】〔不動〕頂蓮。両眼見開く〔矜〕胸前で合掌〔制〕左腕横に張り出す。両前膊欠。

【品質・構造】木造、彩色、彫眼。

【時代】江戸時代

49

不動明王立像（挿図49）

【法量】総高一六・四

【形状】頂蓮。条帛、裳を著す。

【品質・構造】木造（岩座を含め一木造）、素地（現状古色）。

【時代】江戸時代

50

不動明王立像（挿図50）

【法量】像高六九・九

【形状】頂蓮。両眼見開く。左牙上出、右牙下出。両手とも腰脇で左羂索、右剣を執る。

【品質・構造】木造（寄木造）、彩色、玉眼嵌入。体幹部は首前で前後二材、頭部は耳前で前後二材を矧ぐ。差首。

【時代】江戸時代

51

矜羯羅童子立像（挿図51）

【法量】像高二三・一

【形状】右を向き、裳を著す。

【品質・構造】木造（一木、カツラかとみられる広葉樹）、彩色。

挿図48

挿図49

挿図50

【時代】不詳
【備考】摩耗損傷のため時代不詳。52と一具。

52 制吒迦童子立像（挿図52）
【法量】像高二四・〇
【形状】左を向き、裳を著す。
【品質・構造】木造（一木、カツラかとみられる広葉樹）、彩色。
【時代】不詳
【備考】摩耗損傷のため時代不詳。51と一具。

53 賓頭盧坐像（挿図53）
【法量】像高八二・六
【形状】円頂。袈裟を偏袒右肩に著し、右肩覆肩衣。両手股間で拱手し、趺坐する。
【品質・構造】木造（クスノキかとみられる広葉樹）、彩色、玉眼（欠失）。頭部前後二材を耳前で矧ぎ、後部材下方に大きな枘を作り出す。体幹部幅の広い材を前後二材を寄せ、側面にうすく別材を寄せる。脚部一材の上に拱手する手を一材重ねる。
【時代】江戸時代か

54 行基菩薩坐像（挿図54）
【法量】像高六三・二
【形状】円頂。下衣、法衣、吊袈裟を著し、拱手して床机座上に坐す。
【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。

挿図51

挿図52

挿図53

挿図54

【時代】江戸時代

55

弘法大師坐像（挿図55）

【法量】像高五六・五

【形状】円頂。法衣、吊袈裟。左手足上で経巻（欠失）を執り、右手胸前で五鈷杵を執る。

【品質・構造】木造、彩色、玉眼嵌入。

【時代】江戸時代

56

大応国師坐像（挿図56）

【法量】像高四二・四

【形状】円頂。下衣、法衣、鐶袈裟、横披。左手先欠失。右手先持物（亡失）を執る。

【品質・構造】木造・寄木造、彩色、玉眼嵌入。

【時代】江戸時代

57

建穂寺学頭坐像（挿図57）

【法量】像高三三・八

【形状】円頂。下衣、法衣、吊袈裟。拱手する。

【品質・構造】木造、彩色、玉眼篏入。

【時代】江戸時代

参考1　建穂神社

牛頭天王踏下像（挿図58）

【法量】像高三四・五

挿図55

挿図56

挿図57

【形状】一面二臂。身色朱。炎髪、頭上に牛頭を表わす。天衣、条帛、臂釧、腕釧、裳を著す。左脚を踏み下げる。左手屈臂し掌を上に五指を握る。右手腰脇で斧を執る。
【品質・構造】木造、彩色、彫眼。頭体一材より彫出する。
【時代】江戸時代
【備考】所在

参考2　羽鳥町内会（木枯神社）

阿弥陀如来立像（挿図59）

【法量】像高五二・二、頂―顎九・八、面長六・〇、耳張七・四、面幅五・七、臂張一五・八、裾張一五・八
【形状】。螺髪刻出、旋毛刻まず。髪際湾曲。袈裟を偏袒右肩に著し、衣縁で右肩を覆う。その下に覆肩衣を著す。覆肩衣は、前膊外側に大きく垂下する。左手垂下、右手屈臂し、一・二指を捻じ来迎印を結ぶ。
【品質・構造】木造、漆箔、彩色、玉眼嵌入。現状厨子内で台座に接着する為、構造は不詳。頭体幹部耳後ろで前後に割矧ぎ、面部をさらに割るか。後頭部別材矧寄せ。前面材頸部で横に切断。両手首先、両足先後補。漆箔後補。
【時代】鎌倉時代
【備考】木枯神社本地仏（八幡神）

挿図58

挿図59

まとめ ―若干の考察とともに―

以上報告してきたように、建穂寺には平安時代から鎌倉時代のものを含む古仏が数多く伝存している。このなかで、特筆すべき像を時代順に挙げ、本報告のまとめとしたい。

伝存像のなかで最も時代が遡ると思われるのが、静岡県の指定文化財にもなっている不動明王立像（作品41・図14～15）である。また、像高一尺ほどの小品ながらも如来形立像（作品30・図24）も平安時代にまで遡ると思われる。

これらに続くのが平安時代末から鎌倉時代初期の、いわゆる藤末鎌初に製作されたと思われる宝冠阿弥陀如来坐像（作品27・図18～20）である。これがかつて建穂寺に存在した常行三昧堂の本尊であり、頭部が後補であることもすでに指摘されているが[7]、今回の我々による調査によって、頭部の補作が慶長十八年のことであり、補作を行なったのは地蔵菩薩踏下像（作品36）を製作した仏師と、おそらく同一人物であろうということも判明した。さらに本像にとって重要な知見は、大日如来坐像と伝えられている像（作品28・図21～23）が、当初は脇侍である四親近菩薩のひとつであったことも、その像容や構造の類似性から推定できたことである。宝冠阿弥陀如来像そのものが、現存作例も少なく貴重なものではあるが、造像当初の脇侍を遺す古像は、栃木・輪王寺像、静岡・伊豆山常行堂旧安置像など限られており、その点でも当像は大変貴重な作例といえよう。

これにつづく鎌倉時代の作例としては、説法印を結ぶ如来形坐像（作品29・図4～8）が挙げられよう。後補による表面の漆箔および金泥が厚ぼったく、像容を損ねている点もあり、一見すると江戸時代の作例のようにもみえるが、鎌倉時代の優品とみられる。一・三指を捻じる説法印を結ぶ点から、阿弥陀との考えもあるだろうが、左脚を前に結跏趺坐する点から[8]、断定を避けて名称を如来形坐像とした。説法印も左右の手の高さが若干異なっており、このような像容の如来像の尊名については、詳しく調べなおす必要があるだろう。本像に関しては近年、これと菩薩形立像（作品34）、県指定の不動明王立像（作品42・図9～13）、毘沙門天立像（作品37・図16～17）を一具のものとみなして、静岡・願成就院の構成に準じた運慶様の流れをひく作例とする見解が出された[9]。たいへん興味深い説ではあるが、上記の理由で阿弥陀とは断定しがたく、また、当寺がかつては天台寺院であった可能性がある点から、不動・毘沙門の組み合わせは観音の脇侍としても造像されうることなども考えられ、なお検討が必要かと思われる。

さて、この時期のものとしては、やはり小品ではあるが、菩薩形の残欠像（作品33・図25）が、この期の正系の仏師（おそらく慶派か）によるものとみられる佳品で、頭部が失われたことがまことに惜しまれる。また、不動明王立像（作品43・図26）も丁寧なつくりの小品で、鎌倉期のものとみてよいかと思われる。そして、当寺の遺品としてはめずらしく銅造の作例である如来形立像（作品31・図27）であるが、後補の木製部分はさておき、銅の部分は鎌倉時代にまで遡る金銅仏である。あるいは当初は善光寺式の阿弥陀などであったものか。

それから、建穂寺の安置像ではないが、建穂寺調査時に建穂の隣町である羽鳥の町内会の方々からみせていただいた、木枯神社の本

地仏である阿弥陀如来立像（参考2）であるが、本像に関しても鎌倉時代にまで遡るもののように見受けられたので、ここに紹介しておく。

最後に、秘仏の千手観音立像（作品1）について若干触れておきたい。今回の調査では人手と時間に限りもあり、本像を厨子より出して詳細に調査することがかなわなかった。しかしその像容は、檀像を意識したとみられる素地像で、毛筋彫りをはじめとする細部の表現までも神経の行き届いた入念の作であった。いずれ再度機会をいただいて詳細な調査を行ないたい。

以上、静岡市建穂寺の安置像に関して報告を行なうとともに、若干の考察を加えた。静岡は地元の教育委員会などによる調査が積極的に行なわれているが、それでもまだまだ興味深い遺例が遺されている。今後とも地元の方々と連携をとりながら調査を進めていきたいと考えている。

註

1　課題番号19202007。研究代表者は京都国立博物館長佐々木丞平。学芸部長以下十六名の研究員が分担者となり、外部の研究者にも一時協力者として適宜ご参加いただいている。

2　調査は平成二十年（二〇〇八）二月二十五日より二十八日の四日間にかけて行なった。調査者は伊東史朗氏（元文化庁、京都国立博物館調査員）、井上一稔氏（同志社大学文学部教授）と筆者の三名である。巻頭に掲載した図版は金井杜道（写真家、京都国立博物館名誉館員）、三原昇（フォトファクトリー・ミハラ）による撮影、文中の挿図は筆者による撮影である。調査にあたっては静岡市教育委員会、建穂町内会、建穂寺檀家、建穂神社氏子、羽鳥町内会の皆さまより多大なるご助力を賜った。記して感謝申し上げる。

3　この時の成果は、『社寺調査報告』二二（京都国立博物館 二〇〇一年）、特別企画「鉄舟寺展」目録（フェルケール博物館 二〇〇一年）として刊行されている。また秘仏の千手観音立像については、淺湫毅「古代檀像の一遺例―静岡鉄舟寺の千手観音立像」『学叢』二四（京都国立博物館 二〇〇二年）を参照されたい。

4　享保二十年（一七三五）に隆賢によって編纂された『建穂寺編年』によると、白鳳十三年に道昭によって創建され、養老七年には行基が当寺を再興し、観音像を造立したとする。

5　『幻の寺 建穂寺』（建穂寺の歴史と文化を知る会 一九九一年）
『建穂寺編年』（建穂寺の歴史と文化を知る会 一九九九年）
大宮康男「遺された彫刻より観た建穂寺（一）（二）」『地方史静岡』二八・二九（地方史静岡刊行会 一九九九年）

6　記載は観音堂の本尊および前立の千手観音からはじめ、その護法神である風神、雷神、二十八部衆立像、つづいて如来、菩薩、天、明王、肖像その他の順で行なった。ただし、それぞれのなかでは調査した順に記載し、特に年代順に並べなおすことは行なっていない。二十八部衆立像については混乱を避けるため『幻の寺 建穂寺』（前註5）の名称にもとづいたが、尊名が入れ替わっている可能性があるものに関しては、名称に伝を付し、正しいと思われる名称を【備考】欄に記した。それ以外の像の名称に関しては筆者の判断による。搬出が困難な金剛力士像については、調査を行なわなかったため割愛している。

7　製作年代の判定については伊東、井上、淺湫の三者で協議を行なった結果ではあるが、責は淺湫にある。

8　法量はセンチメートルである。

9　大宮康男「建穂寺宝冠阿弥陀如来像に就いて」『地方史静岡』二六（地方史静岡刊行会 一九九八年）
管見の限り、平安時代後期以降に製作された阿弥陀如来坐像については、定朝作平等院鳳凰堂像等と同様に、ほとんどのものが右脚を前に結跏趺坐をしている。
山口隆介「定慶様菩薩像の再検討」『佛教藝術』二九九（毎日新聞社 二〇〇八年）